

アカガイ 養成試験

横山 勝幸・青山 宝蔵・須藤 潔

平内町漁業協同組合茂浦支所茂浦漁業研究会

はじめに

アカガイ増殖の最も効果的な手段と考えられる種苗放流については、陸奥湾においても過去に幾度か試験されているが、その効果を認めるに到っていない。昨年度は、むつ市漁協の共同漁業権内地先に約1万個のアカガイ稚貝の放流試験を行なったが、今年度は、平内町漁協茂浦支所の協力を得て、共同漁業権内のホタテガイ放流漁場への放流試験を行なった。試験漁場は過去にアカガイが漁獲されたこともあり、底質は泥場に近い砂泥質である。今回の試験の目的は、第一に、同一漁場におけるホタテガイとアカガイの立体的地まき養殖の可能性を検討することと、第二に、移動性に乏しいアカガイが、ホタテガイ漁場においてはヒトデに捕食される危険性の大きいことを予想して、ヒトデの影響を見ることに置いた。なお、アカガイをホタテガイと同一漁場で養殖するアイデアは、茂浦漁業研究会(須藤元次郎会長)より提起されたものであり、今回の試験は同研究会との共同研究とした。

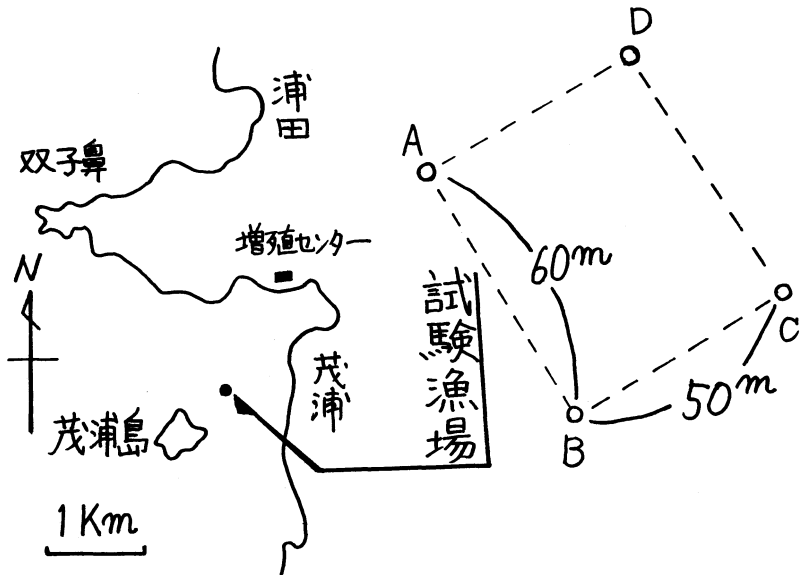
試験方法

試験漁場は、46年産ホタテガイ稚貝を放流してある場所位置を第1図に示した。

A~D点は間縄で測定して設定し、ハイゼックス浮玉を土俵で固定して標識とした。

放流稚貝は、青森市内で天然採苗、中間育成した44年貝約9,000個と45年貝約10,500個、合計約19,500個で、放流面積300m²に対して約6.5個/m²の放流密度となる。

放流稚貝の測定値を第1表に示した。また、ヒトデの影響を調べる目的で第2図に示したようなヒトデ防御用網枠を設置した。



第1図 試験漁場図

放流経過

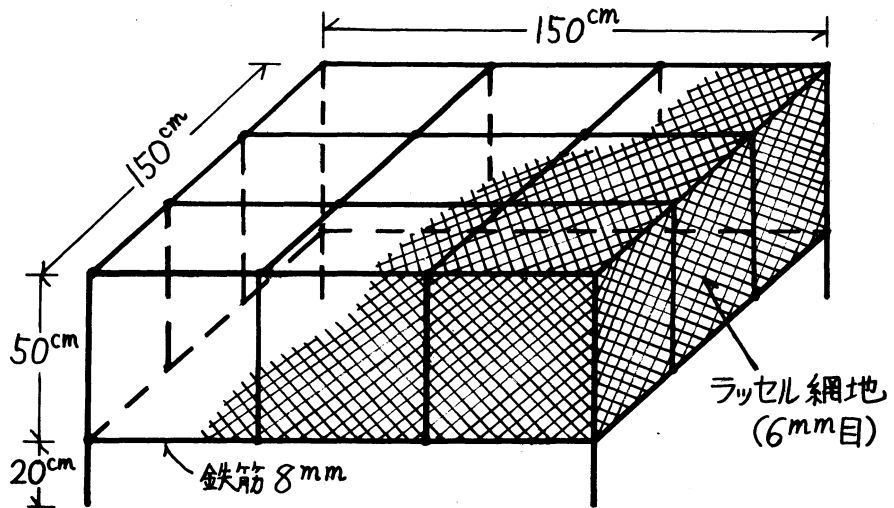
第1表 放流アカガイ稚貝の測定値

昭和47年7月8日、青森市奥内地先に垂下してあったアカガイ稚貝(45年貝, パールネット150個。44年貝, 10段丸籠30個)を船で運搬し、約1時間後に茂浦地先へ垂下した。7月29日、試験漁場へ稚貝を放流するとともに、あらかじめ設置しておいた前述のヒトテ防御用網枠の内側へ44年貝を16個づつ入れた。放流作業は午前10時15分より開始し、約30分間で終了した。アカガイ稚貝を網枠内へ入れる作業と放流状況の観察はスキューバー潜水により行なった。その

No.	44年貝					45年貝		
	殻長 mm	殻高 mm	殻巾 mm	全重量 g	軟体部 重量g	殻重量 g	殻長 mm	全重量 g
1	68	53	37	71	17	27	42	
2	69	52	37	68	16	27	53	
3	68	56	40	73	18	29	53	
4	67	48	37	72	13	32	39	
5	60	45	39	57	14	24	44	
6	67	49	39	71	13	29	52	
7	64	47	40	63	21	27	43	
8	67	47	38	76	16	33	42	
9	64	46	36	54	16	24	41	
10	63	50	39	59	13	28	51	
11	65	48	38	69	14	28	51	
12	64	46	38	66	17	28	44	
13	65	47	37	68	17	30	39	
14	68	51	37	67	18	27	44	
15	66	52	39	69	20	34	47	
16	60	46	37	58	19	28	46	
17	61	47	36	64	16	32	37	
18	57	41	33	60	13	20	49	
19	60	43	38	65	15	35	43	
20	64	55	40	73	18	39	45	
平均	64.4	48.5	37.8	66.2	16.2	29.1	45.3	20.6

の時の観察によれば、試験漁場のホタテガイ稚貝の密度は多い所で20個/m²に達し、平均で12個~13個/m²であったが、ヒトテはあまり見られなかった。放流されたアカガイ稚貝の密度は3~15個/m²と、かなり

バラツキができたが、5~10分後には潜泥を開始しており、放流はほぼ順調に行われたものと思われる。放流時の現場水温は表層で23.0℃、水深1.4mで22.2℃であった。(その後の経過ならびに結果は次年度へ引き続く)



第2図 ヒトテ防御用網枠